

ホスピスの理解度は、まだこんな感じ……

阿部幸泰（“虹”理事）

“虹”のスタッフから、その友人の以下のような話を聞いた。

看護師である友人が、ハローワークに行った折りの話。「ホスピスで仕事がしたいので、そういった求人はありますか？」と聞いたところ、「ホスピスはもう助からなくて、医者がお手上げの人を仕方なく見る施設ですよ？　看護師さん、みんなそういうの嫌がりませんよね？」と……。あまりの発言に友人はショックで一瞬言葉を失ったとか。唯一、「ホスピスで仕事したいのです」というのがやっとで、緩和ケアはやはり必要だということをもっとたくさんの人に理解してもらえたらと思ったとか。

“虹”HP「共に創るコーナー」にボランティアの青年が寄稿しているが、「末期」等の言葉の使い方の影響が、こうしたところにも現れているよう。マスコミも、当事者側の視点での影響を十分に検討せずに「末期医療」、「終末期医療」、「末期がん」等の言葉を使っているのではないだろうか。マスコミの報道や番組を試聴する一般の多くの人には、このハローワークの職員のように、こうした言葉から「医者がお手上げの人」という印象を受けているのだろうと思う。症状の医療的表現の一つに過ぎない言葉が、その状態にあるその人の存在までも「仕方なく見る」対象に過ぎないと思わせてしまっているのではないかと思う。

つくづく、マスコミの影響の怖さを感じさせられた話である。

しかし反面、マスコミに携わる人も一人の人間である。記者自らが、青年の寄稿にあるように、「日々の自らの生き方」を問いつつ、また、何を目的とし、何故にその表現を使うかを当事者の目線で常に自己検証しながら、取材、報道をして行けば、自ずと社会の人々へもその影響が染み渡るともいえる。

マスコミ記者はいうに及ばず、全ての人々が「日々の自らの生き方を問いつづける作業」を大事にして行くことは、生命軽視の現代社会の風潮の歯止めに、少なくない糸口を呈示しうらと思う。

それだけに一度機会があれば、社会風潮に多大の影響を与え得る取材記者に、「貴方は、『末期』とはどういう概念と想いで記事としてお使いですか？」とだけでも、逆取材したいと思う。

一方、「緩和ケア」という言葉がまだまだ市民権を得ていない。市民権を得るまでには、その道のりは長く険しいことと思う。しかしそれ故に、真の意味ある市民権を得るために、難病の症状である当事者共々、「緩和ケア」に携わる方々は、「生きる」という質を大事にする社会への道しるべを呈示し続ける任があるような気もする。